

〔翻 訳〕

ザストロツィーロマンス (2)

パーシー・ビッシュ・シェリー 著
治村輝夫 訳

第三章

ザストロツィとウーゴは、その田舎家が建っている村の外れにあるヒースの野に沿って進んだ。ヴェレツィが窓にもたれていると、低い声が夕方の静寂に乗って不明瞭なつぶやきとなって漂ってきて、耳に届いた。彼は耳を澄ました。目をこらして暗闇の中を見ると、ザストロツィのそびえ立つような姿が見えた。それに、ウーゴの不格好で、ならず者のような足どりも間違えようがなかった。彼らの話は聞えなかったが、切れ切れの言葉だけは耳に届いた。それは腹を立てて公然と非難しているように思えた。低い声が続く、彼らの間に生じた口論が治まったかのように思えた。彼らの声はついには遠くの方へ消えて行った。

ベルナルドは今しがた部屋を出て行った。ビアンカが入って来た。しかしベルナルドがドアの所でぐずぐずしている音をヴェレツィははっきりと聞いた。

老女は部屋の離れた隅に黙って座り続けた。ヴェレツィの夕食の時間だった。彼はビアンカに持ってきてくれるように言った。それに応じて、彼女は少しの乾葡萄を皿に載せて持ってきた。ナイフも持ってこられたのを見て、彼は驚いた。老女がうかつにも甘い対応をしたのだと彼は思った。一つの考えが心をよぎり始めた——今が脱出する時だ。

彼はナイフをつかんだ——彼は老女を意味有りげな目で見た——老女は震えた。彼は窓の所からドアの方へ進んだ。ベルナルドを呼んだ。ベルナルドが入ってくると、ヴェレツィは腕を高く上げて、悪党の心臓にナイフを向けた。ベルナルドが横に飛び退き、ナイフはドアの枠にしっかりと突き刺さった。ヴェレツィはぐいっと力を入れて、それを引き抜こうとした。その試みは無駄だった。ビアンカはよろよろした足で精一杯急いで反対側のドアから出て行き、ザストロツィを大声で呼んだ。

ヴェレツィは開いているドアから飛び出そうとしたが、ベルナルドがその前に立ちはだかった。激しいもみ合いが長く続き、力の勝るベルナルドがヴェレツィを今まさに圧倒しようとした時、ヴェレツィが巧みな一撃を与えて、相手を狭くて急な階段の上から真っ逆さまに落した。

自分の勝利の結果を見届けることをしないで、彼は反対側のドアから駆け出すと、行く手を阻む者に出会うこともなく、ヒースの野をすばやく走った。

月は静かに威厳を漂わせて空高くに懸かり、彼の前に広大な平野を見せていた。どんどん先へと急ぐと、あの田舎家はすぐに見えなくなった。ザストロツィの声が風の吹くたびに聞えるように思えた。振り返ると、ザストロツィの目が肩越しに見ているように思えた。しか

し、たとえビアンカが正しい道を行ってザストロツィを見つけたとしても、ヴェレツィの走る速さが追手を振り払っただろう。

数マイル走ったが、彼の前にはまだわびしいヒースの野が広がっていた。身を隠せそうな田舎家はまだ一軒も見えなかった。ヒースの野の中を隠れるようにゆっくりと流れる小川の土手に、ほんの少しの間彼は体を投げ出した。月光がその水面で戯れていた。彼はそこに映る自分自身の姿にどきとした。彼はいくつかの音が西からの風に乗って運ばれてきたように思った。もう一度元気を出すと、野を横切る道をたどった。

ヴェレツィが再び休息を取る頃には、月は天頂に達していた。とてつもなく大きい二本の松の木が高台に立っていた。その一本に登ると、広大に延びる枝々の中にうまく体を落ち着かせる所を見つけた。

疲れ果てていたので、彼は眠り込んだ。

二時間彼は無意識の状態で静かに横になっていたが、その時音がして目を覚ました。ただのゴキサギの鳴き声だ、と彼は思った。

日の光はまだ見えなかったが、東の方のかすかな縞模様が朝の到来を予兆していた。ヴェレツィは馬の蹄の音を聞いた。ザストロツィ、ベルナルド、ウーゴが馬の乗り手であることが分かった時の彼の恐怖は、どれほどであったことか！ 恐怖に打ちのめされて、彼はごつごつとした枝にしがみついた。彼を迫害する者たちはまさにその場所まで進んで来て、彼がいる木の下で馬を止めた。

「ヴェレツィが永遠に呪われんことを！」ザストロツィが叫んだ「やつを見つけ出すまでは絶対に休まないぞ。見つけ出した時には、私は魂の目的を果たすのだ。さあ、ウーゴ、ベルナルド、先を急ごう」

「旦那」ウーゴが言った。「ここで一息入れて、私らと馬の元気を回復させましょう。たぶん旦那はこの松を寝床にできないでしょうが、私なら登ります。というのも、あの上はとても気持ちのいい寝床になりそうですから」

「いや、駄目だ」ザストロツィが答えた。

「ヴェレツィを見つけるまでは決して休まない、と私は決心しただろう？ 馬に乗るんだ、野郎ども。でないと、死ぬことになるぞ」

ウーゴとベルナルドはむっつりとして従った。彼らは馬を全速力で駆り、すぐに見えなくなった。

ヴェレツィは自分が助かったことを天に感謝した。というのも、自分が休んでいる枝をウーゴが指差した時、この悪党と自分の目が合ったと思ったから。

今は朝だった。ヴェレツィがヒースの野を見渡すと、遠くにいくつかの建物が見えるように思った。もし町か都市にたどり着けたら、ザストロツィの力が及ばないかもしれない。

彼は松の木から下り、遠くのその建物の方角へできる限り急いだ。ヒースの野を約半時間横切って進むと、ついに野の端にたどり着いたことが分かった。

その一帯はこれまでにない様相を帯びていて、田舎家と邸宅の数で自分が都市の近郊にいたことが分かった。今入った大きな道で、彼は自分の考えが正しいことを確信した。二人の農夫を見かけると、道がどこに通じるのかを尋ねた——「パッサウでさあ」というのが返事だった。

パッサウの大通りを彼が歩いたのは、まだ朝のとても早い時間だった。このところの異常な激しい運動のためにひどいめまいがした。それで、疲労に打ちのめされて壮麗な大邸宅に通じる高い石段にへたり込み、腕に頭を乗せるとす

ぐに眠り込んだ。

そこに一時間近くいた時、ひとりの老女に起こされた。彼女は花の入った籠を腕に抱えていた。市が立つ日にはいつもパッサウに持ってくるのが習慣だった。

自分がどこにいるのか分からず、彼は老女の問に対して曖昧で不十分な答え方をした。しかしながら、次第に二人はもっと相手を知るようになった。ヴェレツィは金もなく、またそれを手に入れる手段も持っていなかったので、クラウドディーネ（それが女の名前だった）の申し出——彼女のために働いて、彼女の田舎家を共にする——を受け入れた。その家と小さな庭は、彼女が自分のものだと言えるすべてだった。クラウドディーネは急いで花を売ってしまうと、ヴェレツィを伴ってすぐにパッサウ近くの小さな家に着いた。それは心地よい、耕作地にあった。それが位置している小さな高台の麓には壮大なダニューブ川が流れており、向こう側にはクラウドディーネの領主であるシュヴェッパー男爵所有の森があった。

彼女の小さな家はとても小綺麗に保たれていた。また、男爵の慈悲深さのおかげで、年寄りが必要とするささやかな快適さに欠けることはなかった。

ヴェレツィはこのように辺鄙な所なら、自分は少なくとも静かに過ごし、ザストロッツィから逃れられるかもしれないと思った。

「どうして」と彼は夕方、家の戸口の前に座っている時にクラウドディーネに言った。「あなたは今朝私にそのような申し出をする気になったのですか」

「ああ！」その老女は言った。「ほんの先週のことなのです、私にとってすべてであったかわいい息子が死んだのは。私のために生計を立てようと余りにも働きすぎて、熱病にかかって死

にました。昨日、私は誰か代わりをしてくれる農夫を見つけたいと思って、息子の死後初めて市場に行きました。その時、あなたが偶然私の前に現れたのです。

「息子は私よりも長生きするものと私は思っていました。私はすぐに墓に入る身なのですから。その時を私は、年とともに大きくなるばかりの心労を取り除いてくれる友人の到来のように心待ちにしていました」

クラウドディーネの孤独な境遇に同情して、ヴェレツィの心は動かされた。私はあなたを見捨てません、と彼はやさしく言った。それに、もしあなたの境遇をよくする何か幸運なことが起きたら、あなたはもう貧困のうちに生きことはなくなるでしょう。

第四章

だが、話をザストロッツィに戻そう。彼はウーゴとヒースの野を歩いて、遅くに戻って来た。彼は田舎家に明かりが灯っていないことに驚いた。戸口に行って激しく叩いたが、応答がなかった。「実に変だ」足でドアをぱっと開きながら、ザストロッツィが叫んだ。家の中に入ると、誰もいなかった。探索すると、ついにベルナルドが階段の下に倒れているのが見つかった。一見死んでいるように見えた。ザストロッツィは彼の方に進み、床から体を起こした。彼は失神してただけで、すぐに気がついた。

驚きが消え失せるとすぐに、彼は何が起きたのかをザストロッツィに話した。「ヴェレツィが逃げたのだ！ 畜生、何たることだ！ この野郎、今すぐ死ぬことになっても当然だぞ。だが、今はお前の命が必要だ。起き上がれ、直ちにローゼンハイムに行って、そこの宿から私の馬を三頭連れてこい。急ぐんだ！ 行

け！」

ベルナルドは震えながら立ち上がると、ザストロツィの命令に従って、半リーグほど北のローゼンハイム村の方に向かってヒースの野を急いだ。

彼が行っている間、ザストロツィはせめぎ合う激情に心をかき乱されて、どうすればいいのかおよそ分からなかった。せかせかとした足どりで家を歩き回った。時々低い声で独りごとを言った。心の感情が目からぱっと閃き出た——眉をしかめたその顔はぞっとするものがあった。

「旦那、やつの心臓を私の剣で血まみれにしてやればよかった、と思います」ウーゴが言った。「旦那がやつを捕まえたら——すぐにそうされるでしょうが——殺してやります」

「ウーゴ、お前は私の友だ。いいことを言ってくれる。だが、駄目だ、あいつを殺してはならん——ああ、何というひどい足かせを私ははめられているのか——馬鹿だった、私は——ウーゴ！ あいつは死なねばならん。これ以上ない地獄の苦しみで死ぬのだ。私は運命に身を任せた。私は報復を味わうぞ。報復は生きることよりも甘美だからな。たとえあいつと一緒に死ぬことになるとしても、また自分の罪の罰として永遠の苦悶の中に投げ込まれるとしても、あいつの破滅という甘美な瞬間を回想してそれに勝る喜びを味わうだろう。ああ、その破滅が永遠のものであったら！」

蹄の音が聞こえ、その時ザストロツィはベルナルドの到着によって話を遮られた。彼らが直ちに馬にまたがると、意気軒昂な馬たちは彼らをヒースの野の中をすばやく運んで行った。

しばらくの間、ザストロツィと仲間たちは平原の中を迅速に運ばれていった。彼らはヴェレッツィと同じ道を行った。彼が休息した松の

木立を通り過ぎた。彼らは先を急いだ。

卒倒しそうな馬たちは、その罪深い重荷をほとんど乗せていることができなかった。松の密集した木立を離れてから、誰も言葉を発していなかった。

ベルナルドの馬は過度の疲労に打ちのめされて、地面に崩れた。ザストロツィの馬も増した状態には見えなかった——彼らは馬を止めた。

「何！」ザストロツィが叫んだ。「探索をあきらめなくてはならないのか？ ああ、悔しいが、そうせざるを得ないようだ。我々の馬はもう先へは進めない。馬のやつらめ。

「しかし、歩いて先へ行こう。ヴェレッツィは私からは逃げられない。どんなことがあっても、私の正当な報復の遂行を遅らせないぞ」

このように話す時、ザストロツィの目は報復を待ち焦がれて、ぎらぎらと光った。そして彼は急ぎ足でヒースの野の南へと向かった。

ようやく日の光が現れた。それでも、ヴェレッツィを見つけ出そうとする悪党たちの懸命の尽力はまだ報われなかった。空腹と渇きと疲労が重なって、彼らは追跡を止めなければならず、石ころだらけの地面のあちこちで横になった。

「この寝床は居心地がよくないですぜ、旦那」ウーゴがつぶやいた。

報復の思いでいっぱいザストロツィはその言葉を受け流し、復讐を待ち望む気持ちに再び元気づけられると、地面からぱっと立ち上がった。そして自分が憎悪する罪のない対象に呪いの言葉をつぶやきながら、先へ進んだ。一日がその朝や前の晩と同じように過ぎた。空腹はヒースの野の灌木の中に生えている野生の木の実では和らげるには十分ではなかったし、喉の渇きは時たま出くわす水たまりの塩気のあ

る水では増すばかりだった。彼らは少し離れた所の木立に気がついた。「あそこはいかにもヴェレッツィが隠れそうな所ですぜ。それにやつは私らと同じように休息したいに違いありません」ベルナルドが言った。「その通りだ」それに近づきながらザストロツィが答えた。彼らはすぐにその境に着いた。それは木立ではなく、シャフハウゼンまで南に延びている広大な森だった。彼らはその中に入って行った。

頭上にそびえ立つ高い木々は天頂に達した太陽を寄せつけなかった。足下の苔の生えた土手は休息を誘った。しかしザストロツィはどのように美しい景色をほとんど気に留めず、ヴェレッツィの隠れ場所となりそうな奥まった所をひとつひとつ急いで調べた。

その探索はすべて無駄だった——その試みは実りがなかった。しかしながら、空腹で気が遠くなり、激しい活動で疲れて芝土にほとんどへたり込みそうになったけれども、彼の精神は肉体の苦役に勝っていた。だからこそ、報復の思いに力づけられて、疲れを知らなかった。

ウーゴとベルナルドはこれまでに耐えてきた極度の疲労に打ちのめされた。これらの暗殺者たちは強靱であったのだが、気を失って地面に倒れた。

太陽が傾き始めた。やがてそれは西の山の下に沈み、森の頂きは消えゆく光に彩られた。夜の影が急速に濃くなった。

ザストロツィは焦げた樫の木の朽ちた幹にしばらくの間座っていた。

空は澄みきっていた。青色の天空は数えきれないほどの無数の星で光っていた。高い森の木の梢は夕べの風を受けて悲しげに波打っていた。月の光は動くにつれて、時々もつれた枝の中を通して下の暗い藪に怪しげな影を投げかけていた。

ウーゴとベルナルドは抗し難いほどの無気力に負け、露の降りた芝土の上に沈み込むように横になって眠った。

とても麗しい景色——過去の人生を喜びと共に思い返し、未来を汚れない情熱で待ち望む者たちにとっては心地よい景色。だが、ザストロツィの残忍な魂とは調和しない。時には報復によって、時には苦痛を伴う悔恨の念あるいはせめぎ合う情熱によってかき乱されるその魂は、過去から何の喜びも得ることができないし、未来にはいかなる幸福も期待できないのだ。

ザストロツィはしばらくの腰を下ろして、胸を引き裂くような瞑想に耽っていた。しかし、良心がしばらくの間彼の過去の人生を恐怖のイメージで映し出したけれども、再びその心は激しい報復の念によって鋼のように冷酷になった。そして飽くことを知らない報復を思い浮かべて奮い立つと、彼は急いで立ち上がり、ウーゴとベルナルドを起こして追跡の途についた。

夜は静かで澄みきっていた。星がきらめく天空の輝きを覆い隠す雲は一つもなかった。地上では大気の静寂をかき乱す風もなかった。

ザストロツィとウーゴとベルナルドは森の中へ進んでいった。彼らはしばらく前から野生のベリー類以外に食べものを口にしておらず、飲食物を調達できどこかの家にたどり着きたいと思っていた。しばらくの間、あたりを支配する深い静寂は破られなかった。

「あれは何だ」堂々とした大きな建物を目にしてザストロツィが叫んだ。その胸壁は背の高い木々の上にそびえ立っていた。それはゴシック建築の様式で建てられていて、人が住んでいる様子だった。

建物の先端の尖った窓は空に向かって高くそ

びえていた。格子造りの装飾は輝く月の光で銀色に光り、下のアーチの暗い影と驚くほどの対照をなしていた。大きな柱廊が張り出していた。彼らはそれに向かって進み、ザストロツィがドアを開けようとした。

窓枠の片側の開いた窓がザストロツィの注意を引いた。「あそこから入ろう」彼は言った。彼らは中に入った。それは多くの窓のある大きな広間だった。中のすべてが気品のある豪華さで整えられていた。その部屋の中の時代がかった四つの巨大なソファが休息を誘った。

窓の一つの近くには文箱が置かれたテーブルがあり、その近くの床に書面が一枚落ちていた。

ザストロツィは通り過ぎる時に何気なくその書面を拾い上げた。「ラウレンティーニ伯爵夫人」と読んだ時、彼は感覚が自分を欺いているのだと思い、窓にさらに近づいた。しかし、そうではなかった。というのも、ラウレンティーニ伯爵夫人の文字はまだその書面にあったから。彼は急いでそれを開いた。すると、その手紙は重要なものではなかったが、ここはマチルダが引越したと言っていた宮殿に違いないと彼に確信させた。

ウーゴとベルナルドはソファに横になって眠っていた。ザストロツィは二人をそのままにしておいて、向かい側の扉を開けた。そこはアーチ型天井造りの大広間につながっていて、向こう側から上に向かう大きな階段があった。彼は上がって行った。長く延びる廊下を進んでいくと、白いローブを羽織った女性が突き当たりに立っていて、その近くの欄干にはランプが燃えていた。女性は後ろにもたれる姿勢でいたので、彼が近づくのに気付かなかった。ザストロツィは女性がマチルダだと分かった。近づくと、目の前にザストロツィがいるのを見

て彼女は驚いて後ずさりした。しばらく黙って彼を見ていたが、ついに叫んだ。「ザストロツィ、ああ！ 私たちはユリアに復讐するのですね。私は幸せですか？ すぐに教えてください。そうですか、あなたが黙っているということは、私たちの計画が実行されたのだと理解します。よくやりました、ザストロツィ！ 心からの感謝の言葉を、私の永遠の感謝を受け取ってください」

「マチルダ！」ザストロツィが返事をした。「私たちは幸せです、と言えたら！ しかし、残念ながら、思いがけない私のこの訪問は惨めな失望の結果に他ならないのです。私はストロバッツォ侯爵夫人のことは何も知りません。まして、ヴェレッツィのことも。どうやら、年齢が私の今の燃えさかる活力を緩めるまで、私は待たねばならないようです。それに、時があなたの情熱を鈍らせる頃、ひょっとしたらあなたはヴェレッツィの愛を手に入れるかも知れません。ユリアはイタリアに戻っていて、ちょうど今ナポリにいます。そして彼女の莫大な財産の中で何の心配もなく、私たちのつまらない報復を笑っています。しかし、いつもそうであるとは限りません」言い表しがたいほどの輝きで目をきらめかせながら、ザストロツィが言葉を続けた。「私は自分の目的を果たします。そして、マチルダ、あなたの目的も同様に果たされるでしょう。ところで、私はこの二日間何も口にしていないのです」

「ああ！ 夕食は下に用意できています。」マチルダが言った。夕食のテーブルに着くと、ワインで活気づいて会話は弾んだ。この物語と関係のないいくつかの話題が話し合われた後、マチルダが言った。「そうでした、ちょっといいことをしたのを言い忘れていました。ユリアの召使の、あの不愉快なパウロの身を確保したの

です。あいつはあの女にとっても忠実に使えていましたから、私たちの目論見を見抜いて、私たちの大きな計画を覆したかも知れません。この建物の下にある土牢の一番下の暗い部屋に、あの男を監禁しました。見に行きますか？ ザストロツィは肯定の答えをすると、部屋の奥に灯っているランプをつかんで、マチルダの後からついて行った。

廃れた通路の中を進んで行く時、そのランプの光は暗闇のごく一部しか追いつかなかった。二人は戸口に着いた。マチルダがそれを開けて、彼らは草の生えた中庭を足早に横切った。

高い胸壁に生えている草は、マチルドとザストロツィが暗く、狭い開き窓から入る時、強く吹く風に物憂げに揺れた。二人は滑りやすい、急な階段を注意して降りて行った。蒸気で曇ったランプは彼らが進んでいくに連れて、ぼんやりとした明かりになった。彼らは階段の下にたどり着いた。「ザストロツィ！」マチルダが叫んだ。ザストロツィは急いで振り向き、ドアに気付くとマチルダの指示に従った。

わずかな藁の上に、鎖で壁につながれてパウロが横になっていた。

「どうかお情けを！ 見知らぬお方、お情けを！」哀れなパウロが叫んだ。

ザストロツィからは、この上なく意味ありげな嘲りの笑み以外に何の返事も与えられなかった。彼らはまた狭い階段を上がって行き、中庭を通り過ぎて夕食の部屋に着いた。

「しかし」再び席に着きながらザストロツィが言った。「土牢にあのパウロのやつを入れておいて何の役に立つのですか？ どうしてあいつをあそこに入れておくのです？」

「ああ！」マチルドが言った。「分かりません。でも、もしあなたが望むなら……」

彼女は言葉を切ったが、目の表情が残りの言

葉を補った。

ザストロツィはワインを杯に並々と注いだ。彼はウーゴとベルナルドを呼んだ——「これを持って行きなさい」マチルダは鍵を差しだしながら言った。悪党どもの一人がそれを受け取ると、まもなく不運なパウロを連れて戻ってきた。

「パウロ！」ザストロツィが大きな声で叫んだ。「お前の自由を回復するよう伯爵夫人を説得した。さあ」彼は続けて言った。「これを取れ。お前の未来の幸福に祝杯をあげよう」

パウロは深々とお辞儀をした。彼は毒の入ったその飲物を一滴も残さず飲み干した。すると、不意に抗し難いめまいに襲われて、ザストロツィの足下に倒れた。突然の痙攣が体を揺さぶり、唇が震え、目が恐ろしげにぐるぐる回り、苦しそうに長く延ばされたうめき声を上げると、彼は息絶えた。

「ウーゴ！ ベルナルド！ あの死体を運んでいって、すぐに埋めろ」ザストロツィが叫んだ。「ほら、マチルダ、ああいう手段でジュリアは死ななくてはならない。ごらんの通り、私が持っている毒薬は効き目が早いのです」

言葉が途切れた。その間ザストロツィとマチルダの目はそれぞれの罪深い魂に多くのことを語っていた。

沈黙はマチルダによって破られた。たった今犯された恐ろしい、非道な行いに衝撃を受けることもなく、彼女はザストロツィに森に来てくれるように言った。内密に告げることがあったのだ。

「マチルダ」森に沿って歩みながら、ザストロツィが言った。「私はここに留まって、何もせずに無為に時を過ごしてはいけません。時はもっと有益に使えます。私は明日あなたの元を離れなければなりません。ユ

リアを破滅させなければなりません」

「ザストロツィ」マチルダが言葉を返した。「あなたがここで不名誉にもぼんやりと過ごすのを私は望むどころか、私自身もあなたの探索に加わります。あなたはイタリアへ——ナポリへ——行き、ユリアの一举一動を監視し、あの女のあらゆる動きを見張り、友人を装って破滅させるのです。けれども、気を付けなさい。あなたは鳩の柔和さを身にまとう一方で、蛇の狡猾さを忘れてはなりません。あなたを頼りしています、あの女を破滅させることでは。私の方はヴェレツィを見つけ出すことに尽力します。私自身が彼の愛を手に入れましょう。ずうずうしくも私と張り合うという罪を、ユリアは死んでその忌まわしい血でもって償わなければなりません」

このように二人が言葉を交わしている間に、二人が破滅のそのおぞましい企てを立てている間に、夜は過ぎた。

低く垂れ込める濃い霧の下からはすに光を放つ月明りは、嵐が迫っていることを告げていた。赤く染まった空は黄色がかった光彩を帯びていた。森の木々のてっぺんは強まりゆく嵐の中でかさかさ音を立てた。大粒の雨が落ち、稲妻の閃き、そして一瞬後には雷の炸裂する轟きがマチルダの胸を突然の恐怖で襲った。しかしながら、彼女はすぐにそれに打ち勝ち、自然力の戦いを無関心に眺めながら、ザストロツィとの談話を続けた。

将来の多くの計画を夢見ながら、二人は夜を過ごした。時々悔恨の微光がマチルダの心を襲うことがあった。嵐を気にもせず、彼らは遅くまで森に留まっていた。邪悪に興奮していた彼らもついにそれぞれの寢床を求めたが、眠りは彼らの枕には訪れなかった。

マチルダは途方もない空想の豊穡の中で、

ヴェレツィの均整の取れた姿と表情豊かな顔立ちを思い描いた。一方、二心を抱くザストロツィは、彼女の愛する男が最後には耐える運命にある苦痛を期待して残忍な喜びを感じ、自分の計画を変更した。というのも、もっとすばらしい報復のやり方が彼の目の前に開かれたから。

マチルダは不安と興奮で眠れない夜を過ごした。心はせめぎ合う情熱で苦しめられ、魂全体が恐怖と邪悪の行為に興奮していた。ザストロツィの顔は、彼女が朝食室で出会った時と同じように、報復を決意した迷いのない表情をしていた。「私がこれから船出する邪悪の海を思うと」マチルダは叫んだ。「ぞっとするような気持ちです！ それでも、ヴェレツィ——ああ！ あの人のためなら私は永遠の幸福の望みを失ってもいい。あの人を私のものと呼ぶ甘い考えの中では、誠実な心づかいも、誤った迷信から生じる恐れも、私が大胆不敵な行為で彼にふさわしい人間になることを妨げられないでしょう。そうです、私は心に決めました」マチルダは言葉を続けた。その時彼女の魂は、彼の優美な姿を思い出して、十倍もの愛によって襲われていた。

「そして私も同じように心に決めました」ザストロツィが言った。「私は報復することを心に決めました。私の報復はなし遂げられるでしょう。ユリアは死に、ヴェレツィは——」

ザストロツィは言葉を切った。彼の目は異常な表情を浮かべて光っていたので、マチルダは、彼が口に出した以上のことを意味しているのだと思った。彼女が目を上げると、彼の目と会った。

罪で無情になっているザストロツィの頬は一瞬の赤みを帯びたが、すぐそれは消え去り、顔はいつもの揺るぎのない、断固とした表情を

取り戻した。

「ザストロツィ！」マチルダが叫んだ。「もし万が一あなたが偽っているのなら、もし万が一あなたが私を騙そうとしているのなら——いや、まさか。あり得ない——赦してください——言ったことは本心ではありません。私の思いは錯乱しています——」

「いいでしょう」ザストロツィが高慢に言った。

「でも、あなたは私の一瞬の、うつろな疑いを赦してくれますね」マチルダは言う、うつろな目を彼の顔にじっと向けた。

「魂が述べていない、くだらない、うつろな表現について、私たちはくどくどと話すべきではありません」ザストロツィが言葉を返し

た。「それに、私はあなたに赦しを請います、私の曖昧な言い方であなたの心をわずかでも騒がせてしまったことを。でも、信じてください、マチルダ、私たちはお互いを見捨てることにはないでしょう。あなたの大目的は私の大目的です。私たちの間の不信は愚かです。——しかし、当面はお別れです。私はベルナルドに、パッサウに行って馬を手に入れるように命じなければなりません」

その日が過ぎていった。二人ともベルナルドの到着を今か今かと待ちわびた。——「さようなら、マチルダ」ベルナルドが連れてきた馬にまたがりながら、ザストロツィは叫ぶと、イタリアへの道を取って、馬を駆った。